

京都大学教育学部卒業生調査・
教育学研究科修了生調査
結果の概要

京都大学教育学部同窓会（京友会）

京都大学大学院教育学研究科

2013 年 3 月

はじめに

京都大学教育学部の卒業生と教育学研究科の修了生がすでに各方面において広く活躍しておられることは、よく知られております。しかし、これまで教育学部・教育学研究科といたしましても、京都大学教育学部同窓会（京友会）〔以下では、京友会〕といたしましても、卒業・修了された方々から、教育学部・教育学研究科で受けた教育や学生生活を振り返っていただき、その後の人生に与えた影響や意味をお尋ねする機会がありませんでした。国立大学法人は現在、その活動を社会に対して直接説明する責任を求められております。それは、教育と研究の成果を具体的に示すことを意味しています。このような事情を踏まえまして、今年度の京友会の活動の一つといたしまして、平成10年の大学院重点化以後に京都大学教育学部・教育学研究科を卒業・修了された方々を対象に、大学・大学院の体験を踏まえたご意見を頂戴する調査を、教育学研究科とともに実施することにいたしました。

2012年9月に724名の卒業生・修了生を対象に郵送でアンケート調査を実施いたしました。調査は、会員の方々に卒業生用調査票と修了生調査票の2つの調査票を同封して郵送いたしました。教育学部の卒業生には、卒業生用調査票にお答えいただき、教育学研究科の修了生には、修了生用調査票にお答えいただきました。卒業生であり、修了生でもある方は、両方の調査票にお答えいただいております。その結果、241名から回答を得ることができました（回収率は33.3%）。なお卒業生調査の回答者数は187、修了生調査は、108でした（両方の調査票への回答者が含まれますので、合計は295）。

調査結果の集計ができましたので、卒業生調査と修了生調査のそれぞれについて、結果の概要を報告いたします。京友会のホームページ上といたしましては、数量的な結果に限定させていただきます。教育学部・教育学研究科の将来に活かす資料として、利用していただきたいと考えております。

なお、調査の企画・実施・報告書の作成は、平成24年度部局自己点検・自己評価委員会（委員長：岩井八郎、委員：西岡加名恵、松下姫歌）が担当いたしました。

お忙しいところ、調査にご協力いただき誠にありがとうございました。

卒業生調査の概要

1. 回答者の属性：回答者の9割以上が40歳以下、6割以上が女性

回答者の属性について、説明します。回答者187名中、男性が35.8%、女性が64.2%でした。年齢は、25歳から39歳までが、回答者の79.6%を占めています（図A1、図A2）。入学年度は、1995年から2009年までが、回答者の84.2%を占めています。平成10年以降の卒業生を対象としているため、このような結果になっております。編入学の方、転入学の方も含まれており、編入学が18名、転入学が7名でした。

教育学部において在籍していた系は、44.4%が教育心理学系、27.8%が関連教育システム系、26.7%が現代教育学系でした。回答者は、教育心理学系にやや偏っています。

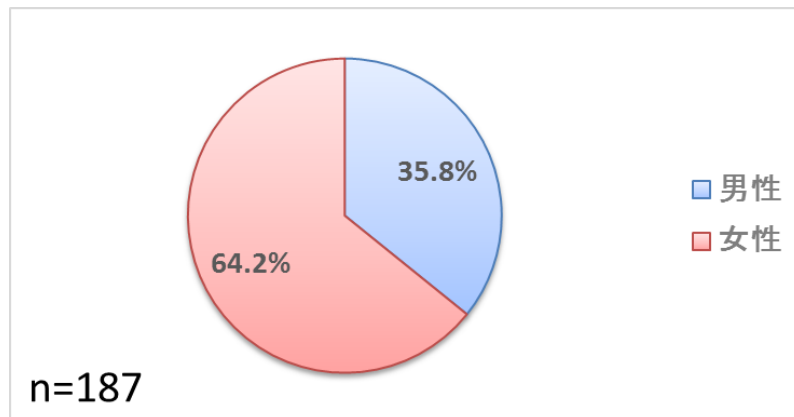


図 A1. 回答者の性別

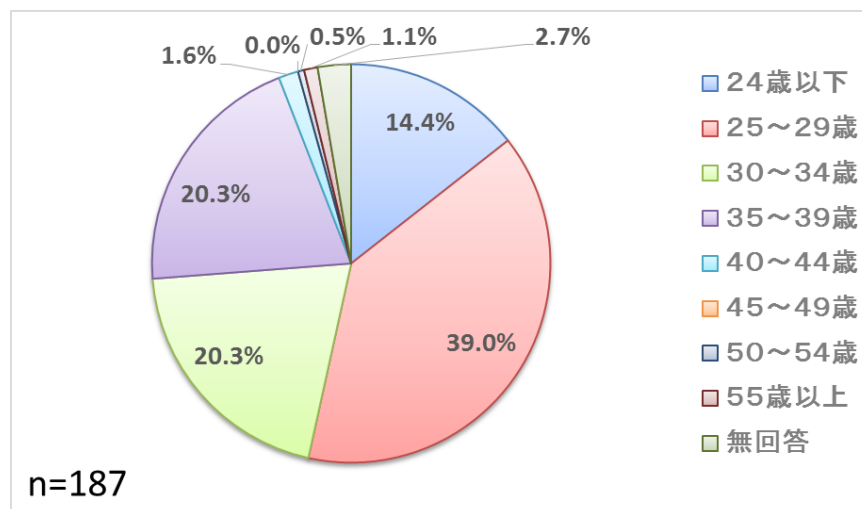


図 A2. 回答者の年齢

2. 現在の仕事：6割が専門技術職

現在の勤め先の形態は、40.6%が「民間のフルタイム被雇用者」、28.9%が「公務員」でした。現在働いていない回答者は、19.3%（36名）であり、その中で、28名が大学院生です（図 A3）。

現在の勤め先での仕事については、専門・技術職が 59.6%（90 名）、事務・営業職が 28.5%（43 名）でした。経営者や管理職は、年齢が若いこともあり、まだ少ない結果となっています。専門・技術職については、どのような職種かをさらに尋ねていますが、90 名中、25 名が心理系専門職、20 名が短大・大学の教員、17 名が中学・高校の教員でした。

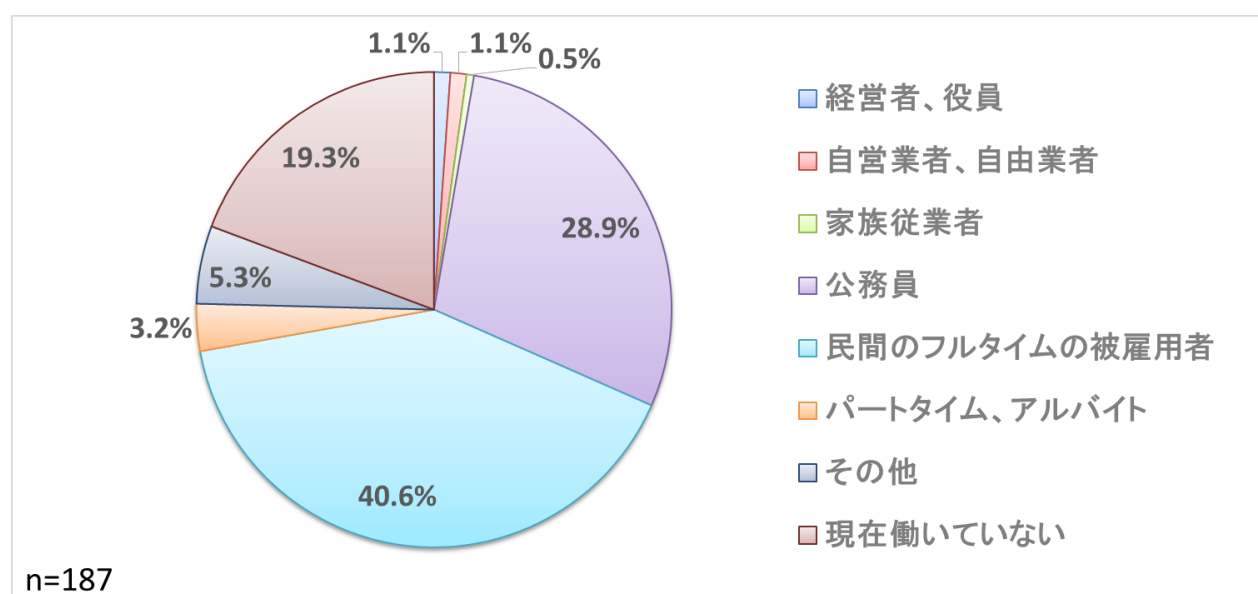


図 A3. 現在の仕事

3. 仕事の満足度：現在の仕事の満足度は高い

卒業後、最初に就職した職種・分野について、教育学部入学時に希望していた職業であったかを尋ねました。これまで仕事についたことのある回答者（165 名）のなかで、「希望していた職種・分野」であった方は、23.5%でした。「入学時とは異なるが在学中に自分が希望するようになった職種・分野」が 40.6%と最も多くなっています。「希望とは異なるが納得できる職種・分野」は 13.9%でした。希望とは異なり「不本意な職種」と回答した方は 2.1%でした（図 A4）。現在仕事をしている回答者（158 名）のなかで、「最初の仕事に近い職種・分野で仕事をしている」方は 87.3%です。職種・分野を変えた方は、10.1%です（図 A5）。

現在仕事をしている回答者（158名）のなかで、現在の仕事に満足していると回答した方は 75.9%です。満足度は高いといえます。（図 A6）

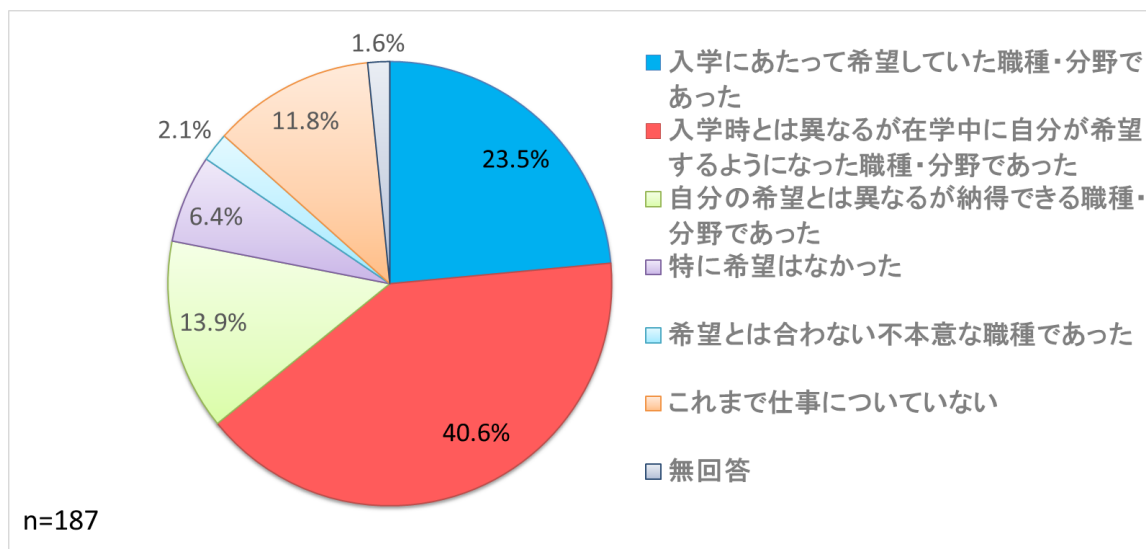


図 A4. 最初に就職した職種・分野

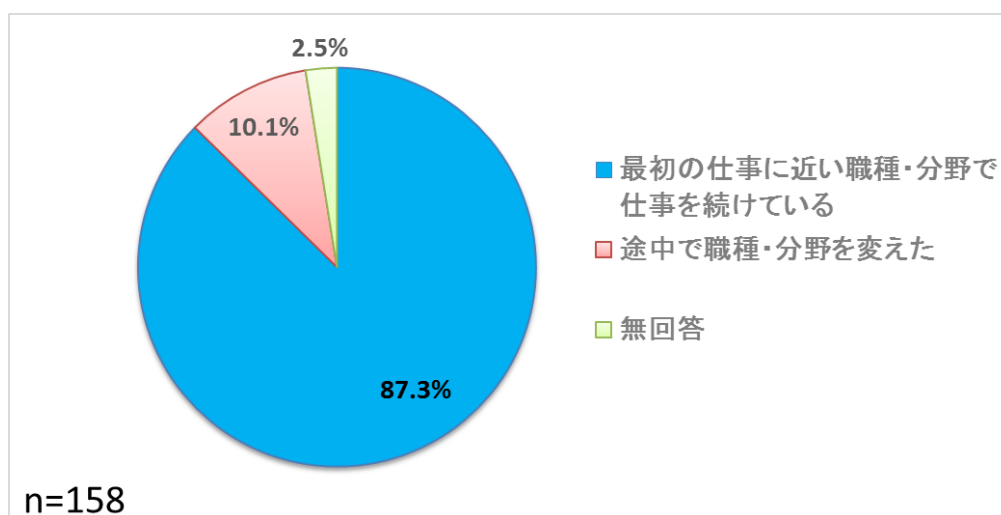


図 A5. 仕事の継続状況

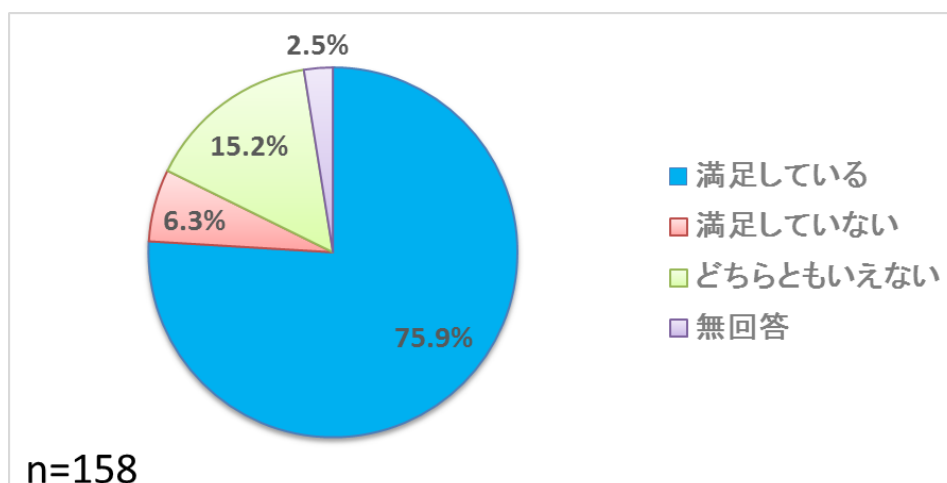


図 A6. 現在の仕事の満足度

4. 大学時代の授業や学習：専門科目の満足度は高い

アンケートでは、一般教養科目から専門科目まで、授業や学習について満足度を尋ねました。全体に専門科目の満足度は高いという結果が得られました。卒業論文の作成については、67.4%が満足しています（非常に満足＋満足）。ゼミでの指導・議論は、63.6%が満足しており、その他の学部専門科目も78.6%と満足度が高い結果となっています。ただし、専門科目の講読演習（英語）と教養科目の英語（教育科学）については、満足度は41.7%と32.6%とあまり高くありません（図 A7）。

「仕事をする上で役立ったか」についても、卒業論文の作成は、60.4%が役立った（非常に役に立っている＋役に立っている）との回答が得られました。また、ゼミでの指導・議論も59.9%が役立ったと回答しており、その他の学部専門科目も57.2%が役立ったとの回答です。一方、専門科目の講読演習（英語）について役立ったとの回答は30.5%、英語（教育科学）については、20.8%でした。その他の教養科目も役立ったとする回答の割合は低い結果となっています（図 A8）。

5. 求められる知識・能力：自ら課題を立て解決する能力

指導教員との関係については、3つの項目について、「指導されたか」を尋ねました。「ゼミ・論文などでの研究指導」を受けたとする回答は、53.5%でした。授業などでの学習指導や進路指導については、指導された割合は、24.1%と14.4%と低くなっています（図 A9）。

教員はもっと指導に取り組むべきかについては、「ゼミ・論文などでの研究指導」は、58.3%が密接に指導に取り組むことを肯定しています。また「授業などでの学習指導」も、41.7%が密接に指導に取り組むべきだとしています（図 A10）。

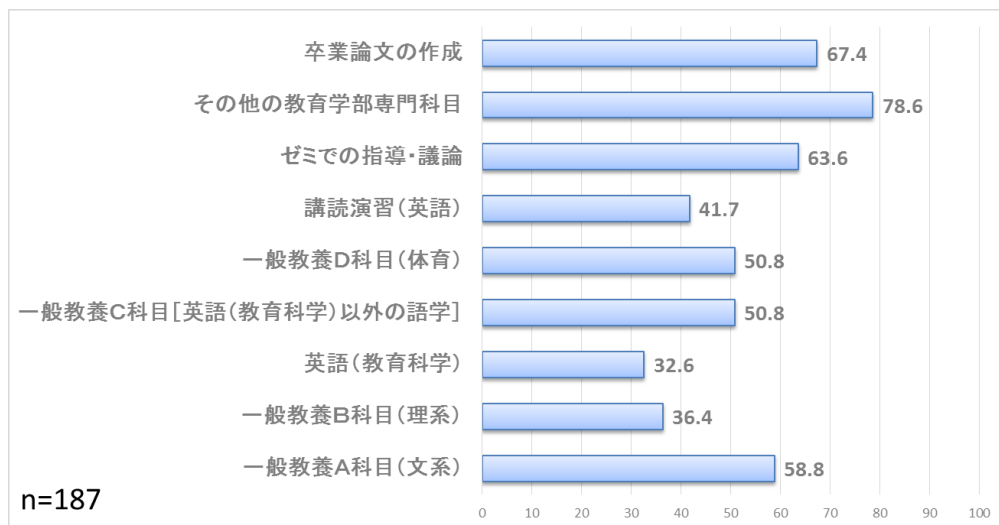


図 A7. 大学で受けた授業の満足度(%)

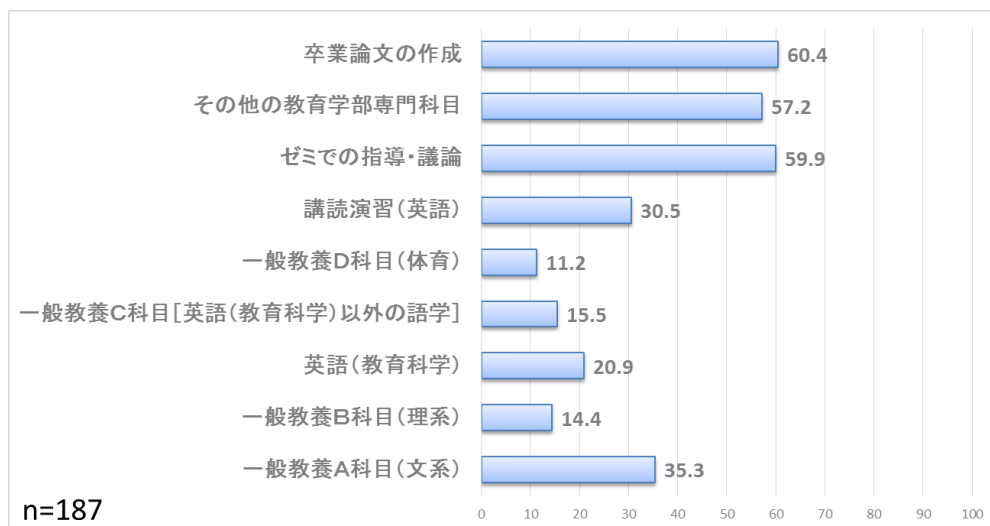


図 A8. 大学で受けた授業の役立ち度(%)

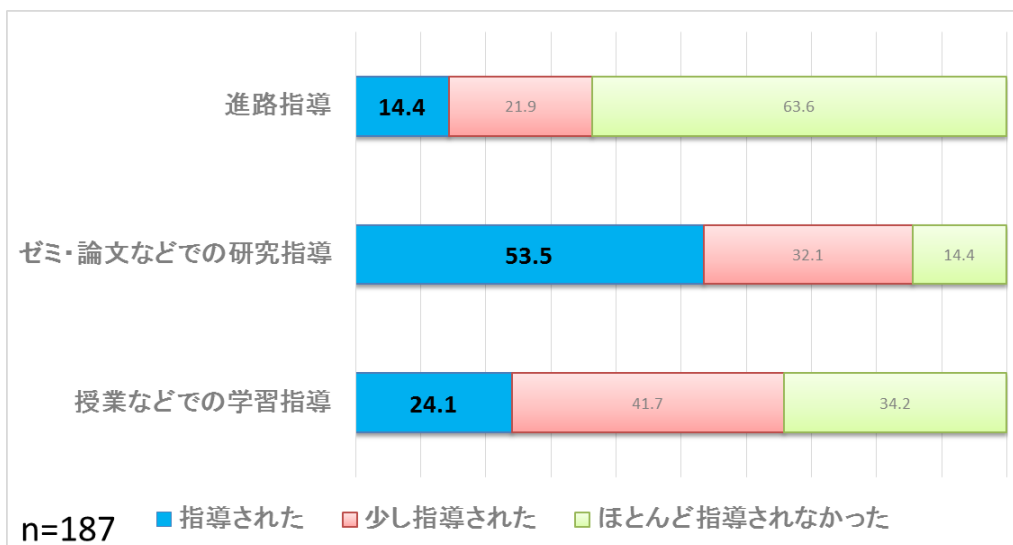


図 A9. 指導された程度 (%)

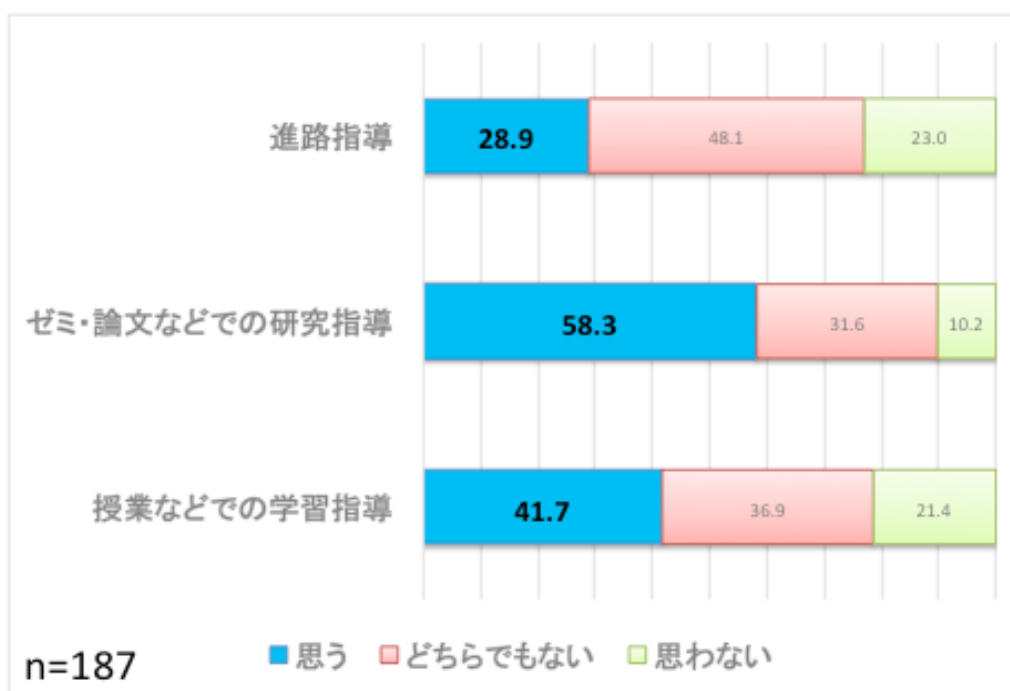


図 A10. 密接に指導に取り組むべきか (%)

教育学部では今後、どのような知識や能力を育てることが重要であるかに関して、6つの項目を提示して、回答者に順位をつけてもらいました。「自ら課題を立て解決する能力」を1位とする回答が46.0%と最も高い結果となっています。「専門的な深い知識と技術」は35.3%の回答者が1位としており、2番目に高い項目でした。その他の項目を1位に選ぶ回答者は少数でした。「仕事に役立つ実践的な知識」については、それを1位に選ぶ回答者は3.7%と低く、6位とする回答者は38.0%となっています。「国際性（語学力を含む）」も教育学部にあまり求められていないようです（図 A11）。

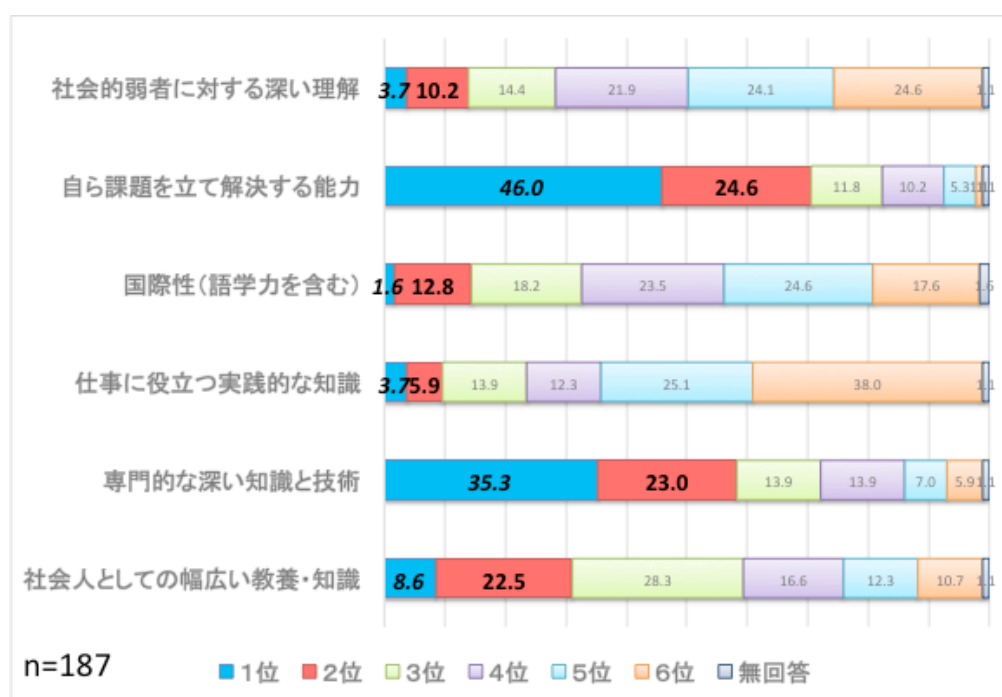


図 A11. 教育学部で学ぶべき知識や能力（%）

6. 大学生活：7割以上が「勉学・研究に力を入れた」

京都大学の「自由の学風」の教育理念が与えた影響について、回答者の81.8%が「プラスに働いた」と肯定しています。

在学中の課外活動については、4分の3の回答者がサークルかクラブに所属していたと回答しています。京都大学に關係するサークルなどに入っていなかった回答者は、23.0%でした（図 A12）。サークルのなかでは、文化系のサークル（同好会）の参加していた方が33.2%と最も多く、クラブ・サークルなどに参加していた方のなかで、90%以上が1年次、2年次に参加しており、3年次も参加していた方も82.5%になっています。

学生生活で勉学・研究、課外活動、ボランティア活動、アルバイトにどの程度力を入れていたかに関する設問については、「勉学・研究」に力を入れていた回答者（とても力を入れていた＋それなりに力を入れていた）は、75.4%と高い割合です。「クラブ・サークルなどの課外活動」は 66.3%、「アルバイト」は 63.1%です。「ボランティア活動」は 19.3%となっています（図 A13）。

学生時代の勉学・研究、課外活動、ボランティア活動、アルバイトがその後の人生で役に立っているかについては、「勉学・研究」が役に立っている（非常に役に立っている＋役に立っている）とした回答が、82.9%と高くなっています。また「アルバイト」も 75.9%と高く、「クラブ・サークルなどの課外活動」は 58.3%、「ボランティア活動」は 24.6%となっています（図 A14）。

学部での 4 年間は、人生に大きな影響を与えたかについては、59.4%が「非常にそう思う」と回答しており、33.7%が「まあまあそう思う」と回答しています。肯定的な回答は、93.0%と大変高くなっています。

さらに、人生に大きな影響を与えた活動についても尋ねていますが（複数回答可）、「学生生活・友人との交流」が 81.0%となっています。「学問」も 66.1%あり、「教員との交流」については、28.2%でした。

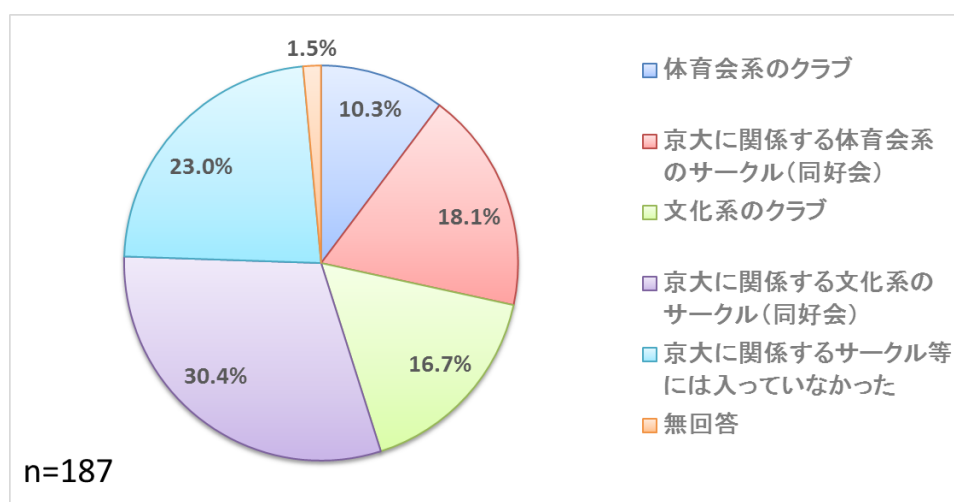


図 A12. 在外中の課外活動

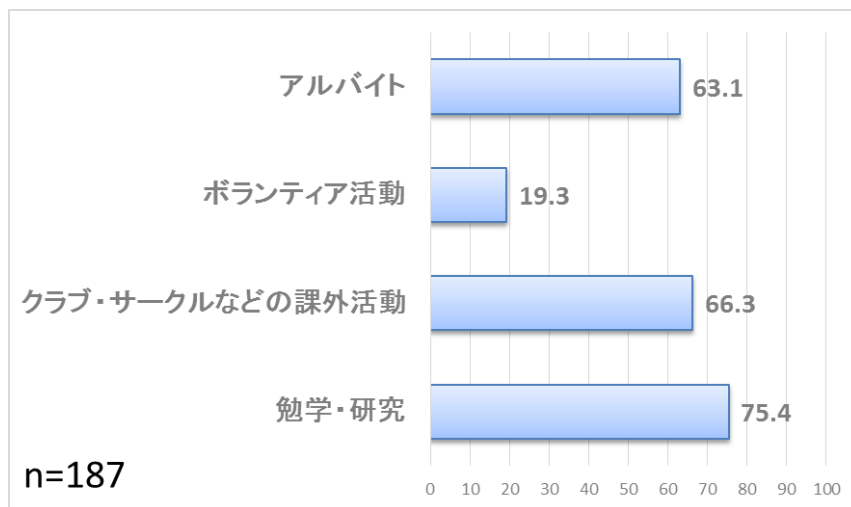


図 A13. 力を入れた活動 (%)

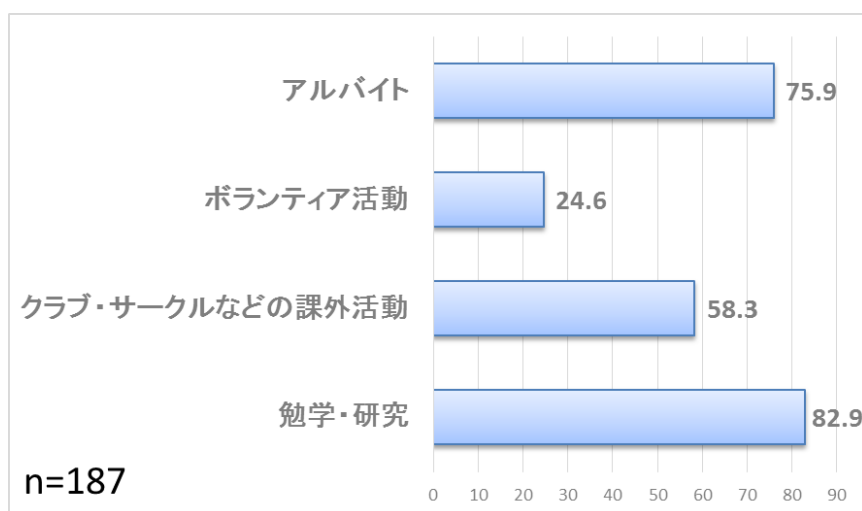


図 A14. 役に立った活動 (%)

修了生調査の概要

1. 回答者の属性：回答者の 73% が 40 歳以下、女性は 57%

回答者 108 名中、男性が 42.6%、女性が 57.4% でした（図 B1）。回答者の年齢は、73.1% が 25 歳から 39 歳までとなっています。入学年度は、回答者全員が 1995 年以降となっており、平成 10 年以降の修了生を対象とした結果です。

教育学研究科で在籍していた専攻は、49.1% が教育科学専攻、42.6% が臨床教育学専攻、無回答が 8.3% でした。また、専修コースの修了生は、24.1% でした。

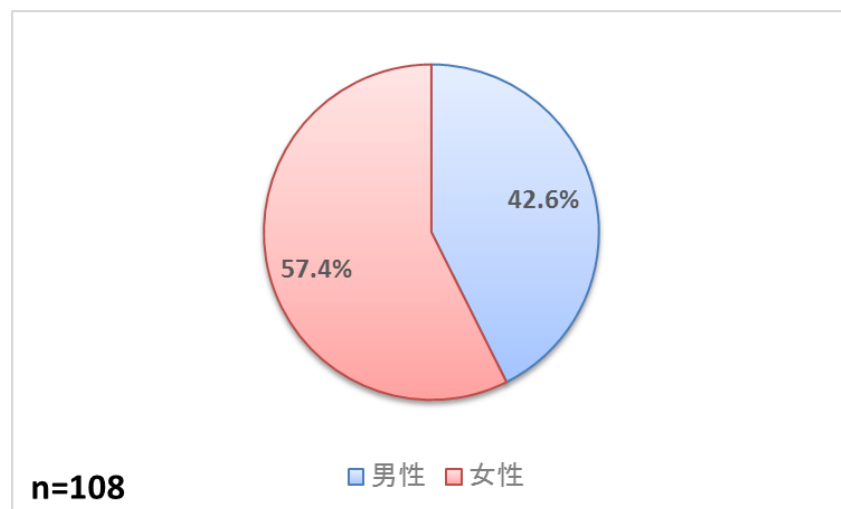


図 B1. 回答者の性別

2. 現在の仕事：大半が専門・技術職

現在の勤め先の形態は、30.6% が「民間のフルタイム被雇用者」、23.1% が「公務員」でした。「パートタイム、アルバイト」は 6.5% となっています。現在働いていない回答者は、22.2%（24 名）であり、その中で、18 名が大学院生でした。

現在の勤め先での仕事については、専門・技術職が 89.3%（75 名）となっており、事務・営業職、管理職がそれぞれ 3.6%（3 名）でした。大半が専門・技術職に就いています。

専門・技術職については、どのような職種かをさらに尋ねていますが、75 名中、31 名が短大・大学の教員、22 名が心理系専門職、12 名が中学・高校の教員でした。

3. 仕事の満足度：現在の仕事に対して、70%が満足

修了後、最初に就職した職種・分野について、入学時に希望していた職業であったかを尋ねています。これまで仕事についたことのある回答者（95 名）のなかで、「希望していた職種・分野」であった方は、52.6%でした。半数以上が希望通りに就職しています。「入学時とは異なるが在学中に自分が希望するようになった職種・分野」が 27.4%、「希望とは異なるが納得できる職種・分野」は 7.4%でした。希望とは異なり「不本意な職種」は 3.2%と少ないです（図 B2）。

現在仕事をしている回答者（92 名）のなかで、「最初の仕事に近い職種・分野で仕事を続けている」方は 87.0%です。職種・分野を変えた方は、7.6%です。

現在仕事をしている回答者（92 名）のなかで、現在の仕事に満足している回答者は 70.7%で、満足度は高いといえます（図 B3）。

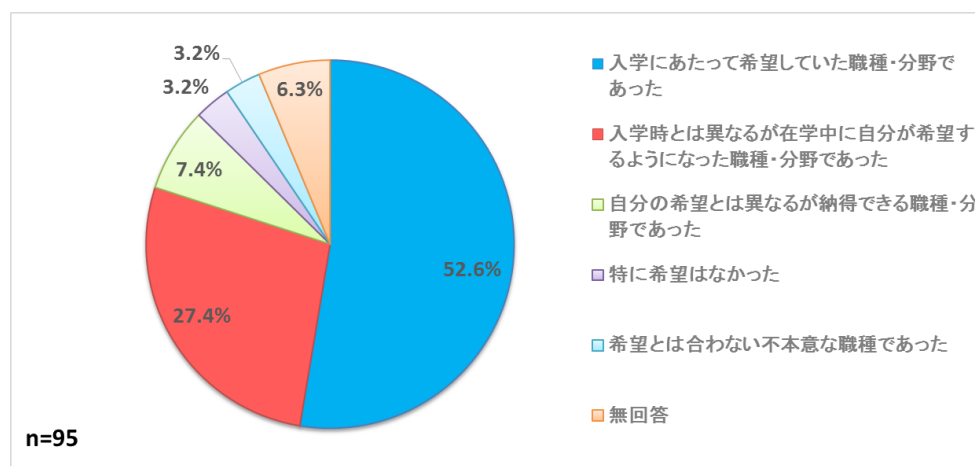


図 B2. 最初に就職した職種・分野

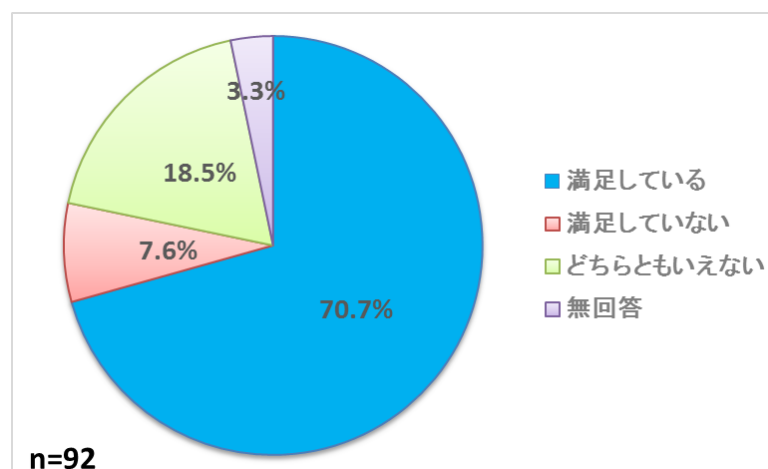


図 B3. 現在の仕事の満足度

4. 大学院時代の授業や学習：73%が修士論文・博士論文の作成に満足

大学院で受けた授業や学習に関しては、「ゼミや実習での指導・議論・実践」「修士・博士論文の作成」「その他の専門科目」の3項目に対する満足度を尋ねています。「ゼミや実習での指導・議論・実践」に対して、88.1%が満足している（非常に満足＋満足）と回答しています。「修士・博士論文の作成」は、73.1%が満足ですが、11.1%は満足していないとの回答です（あまり満足していない＋全く満足していない）。「その他の専門科目」は、81.5%が満足となっています（図 B4）。

「仕事をする上で役立っているか」については、「ゼミや実習での指導・議論・実践」は、回答者の 84.3%が役立っている（非常に役に立っている＋役に立っている）としています。「修士・博士論文の作成」は、79.6%が役立っていると回答しており、「その他の専門科目」も 71.3%が役立っているとの結果となっています（図 B5）。

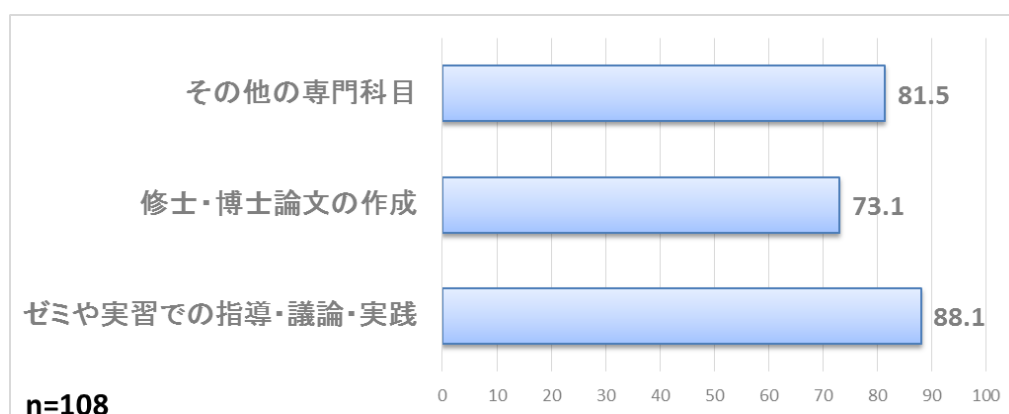


図 B4. 大学院の授業：満足度 (%)

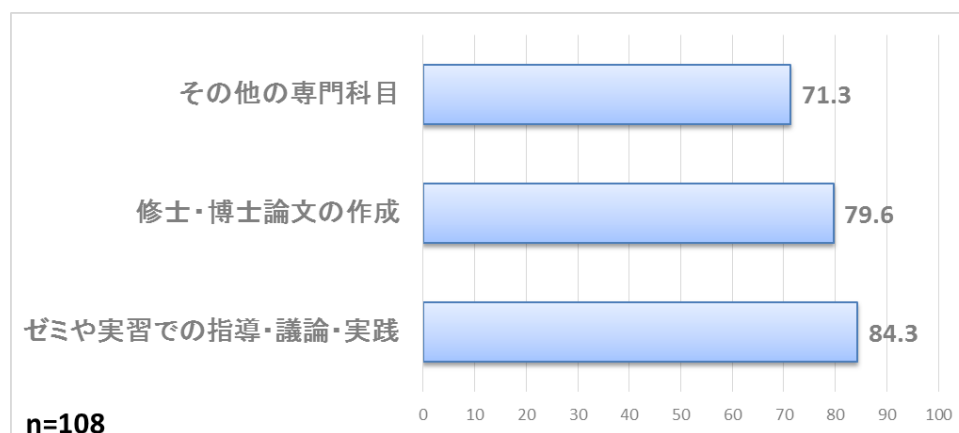


図 B5. 大学院の授業：役立ち度 (%)

5. 今後育てるべき知識や能力：専門的な深い知識と技術

教育学研究科では今後、どのような知識や能力を育てることが重要であるかに関して、6つの項目を提示して、回答者に順位をつけてもらいました。「専門的な深い知識と技術」を1位とする回答が49.1%と最も高く、次に「自ら課題を立て解決する能力」を1位とする回答が多く、33.3%でした。その他の項目については、1位に選ばれた割合は低い結果となっています。「仕事に役立つ実践的な知識」をみると、1位に選んだ回答者は6.5%と低く、6位は35.2%となっています。「国際性（語学力を含む）」も教育学研究科に対してあまり求められていません（図B6）。

指導教員の関係については、3つの項目について、指導されたかを尋ねています。「論文の指導」については、67.6%が指導を受けたと回答しています。「ほとんど指導されなかった」は9.3%でした。「授業での指導」を受けたとする回答は、55.6%でした。「進路指導」は、28.7%と低くなっています（図B7）。

教員はもっと密接に指導に取り組むべきかを、3項目について尋ねていますが、「論文の指導」に対して、48.1%が密接に指導に取り組むことを肯定しています。「授業での指導」に対しては41.7%、「進路指導」に対しては35.2%が、密接に指導に取り組むべきだとしています（図B8）。

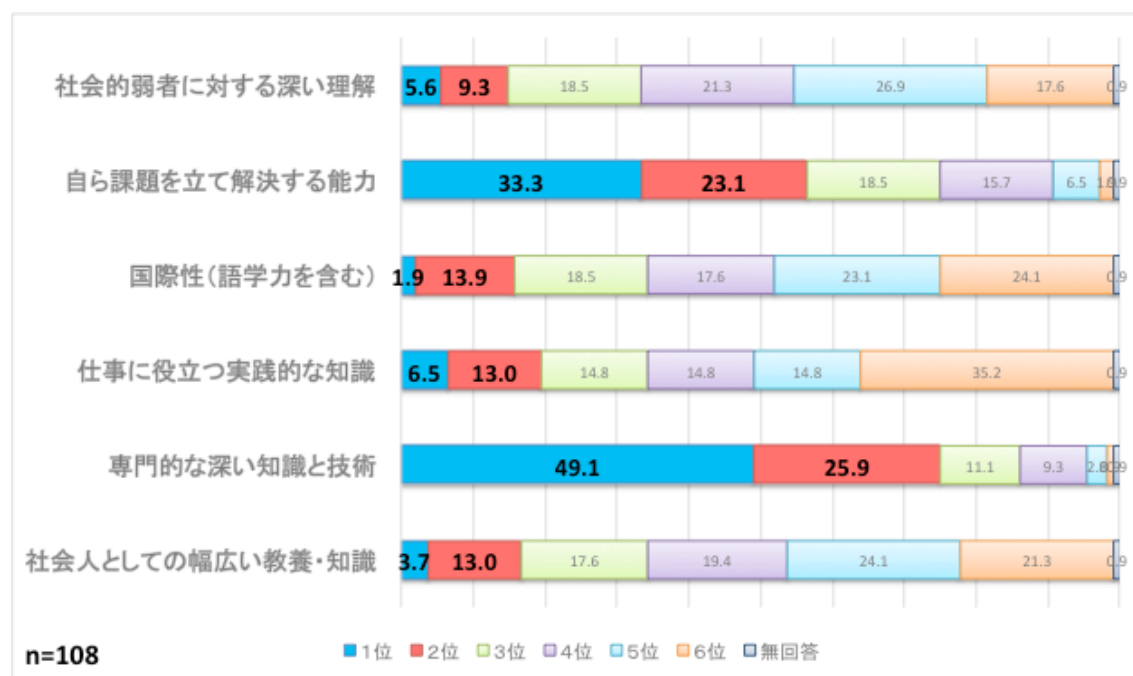


図 B6. 教育学研究科で育てるべき知識や能力 (%)

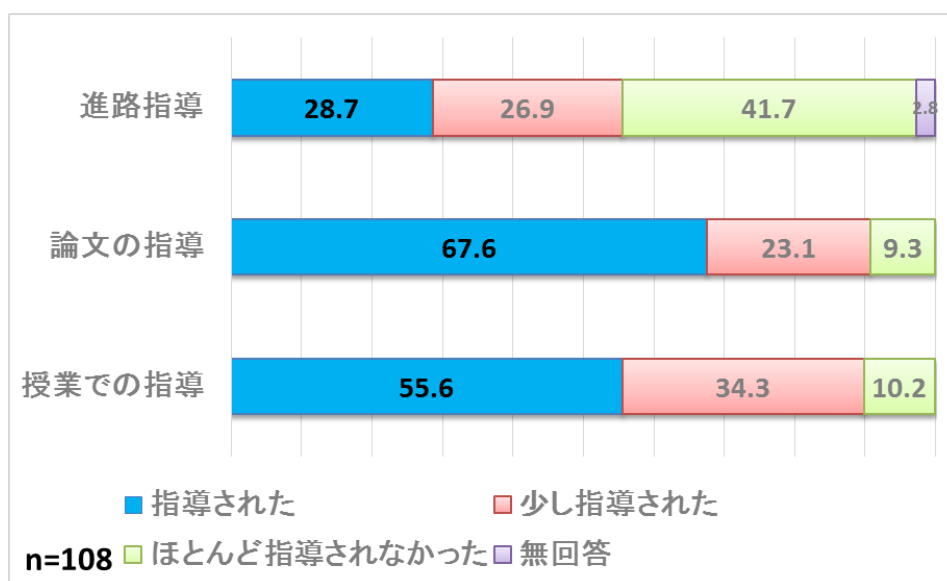


図 B7. 指導された程度 (%)

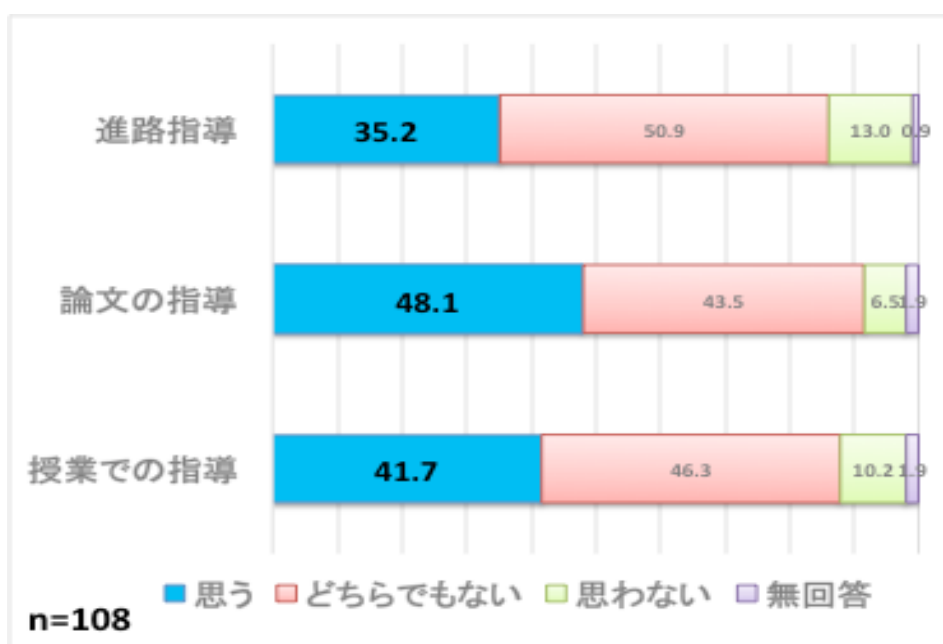


図 B8. 密接に指導に取り組むべき (%)

6. 大学院生活：約 3 割が経済的に困った経験あり

京都大学の「自由の学風」の教育理念が与えた影響について、回答者の 82.4%が「プラスに働いた」と肯定していました。

教育学研究科時代の経済状況について、「親からの仕送り」「学生支援機構の奨学金」

「その他の民間奨学金」「学術振興会の助成金」「非常勤講師などの給与」「アルバイト」のそれぞれが収入の何割を占めていたかを尋ねました。

「親からの仕送り」を「まったく受けていない」回答者は、45.4%でした。収入の5割以上を「親からの仕送り」に頼っていた回答者は、25.9%でした（図 B9）。

「学生支援機構の奨学金」については、51.9%が「まったく受けていなかった」と回答しています。収入の5割以上がこの奨学金であった回答者は、24.1%でした。

「その他の民間奨学金」を受けていた回答者は、1.8%で、「学術振興会の助成金」は、88.0%が「受けていなかった」と回答しています。収入の5割以上がこの助成金であった回答者は、7.4%でした。

「非常勤講師などの給与」は 59.3%が「なし」と回答していました。非常勤講師をしていた回答者 41 名の中で 27 名（65.9%）が収入の5割以下でした。

「アルバイト」は 55.6%が「なし」と回答していました。アルバイトをしていた回答者 45 名の中で 34 名（75.6%）が収入の5割以下でした。

教育学研究科時代に「経済的に困ったこと」があったかという質問に対して、29.6%が「あった」と回答していました（図 B10）。

大学院生活のなかで勉学・研究、課外活動、アルバイトにどの程度力を入れていたかに関する設問については、「勉学・研究」に 98.1%が力を入れていたとしています（とても力を入れていた＋それなりに力を入れていた）。「専門性をいかした非常勤の仕事」についても、58.3%が力を入れていたと回答しています。「課外活動」に力を入れていた回答者は、32.4%であり、「アルバイト」に力を入れていた回答者は、30.6%でした（図 B11）。

それぞれの活動がその後の人生で役に立っているかに関して、「勉学・研究」は 97.2%が役に立っている（非常に役に立っている＋役に立っている）と回答しています。「専門性をいかした非常勤の仕事」も 63.9%が役に立っているとしています。「課外活動」と「アルバイト」については、役に立っているとする回答は、それぞれ 37.0%と 40.7%となっています（図 B12）。

研究科での大学院生活が「自分の人生に大きな影響を与えた」について、「非常にそう思う」とする回答は 79.6%あり、「まあまあそう思う」とする回答の 18.5%を加えると 98.1%が「そう思う」としています。どのような側面かについては、学問が 95.3%、学生生活・友人との交流が 80.2%、教員との交流が 64.2%となっています（図 B13）。

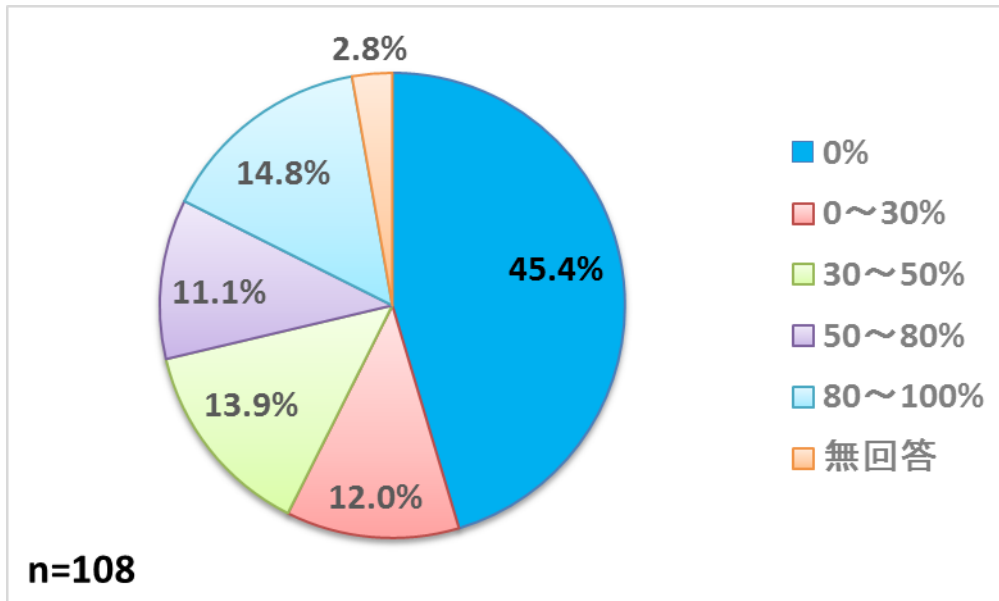


図 B9. 大学院在学中の経済状況：親からの仕送りの割合

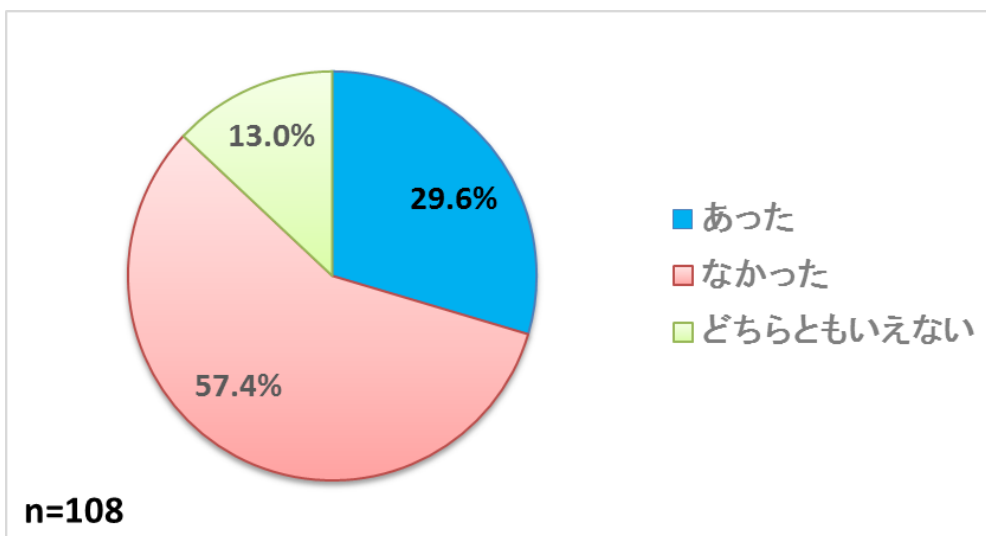


図 B10. 経済的に困った経験あり

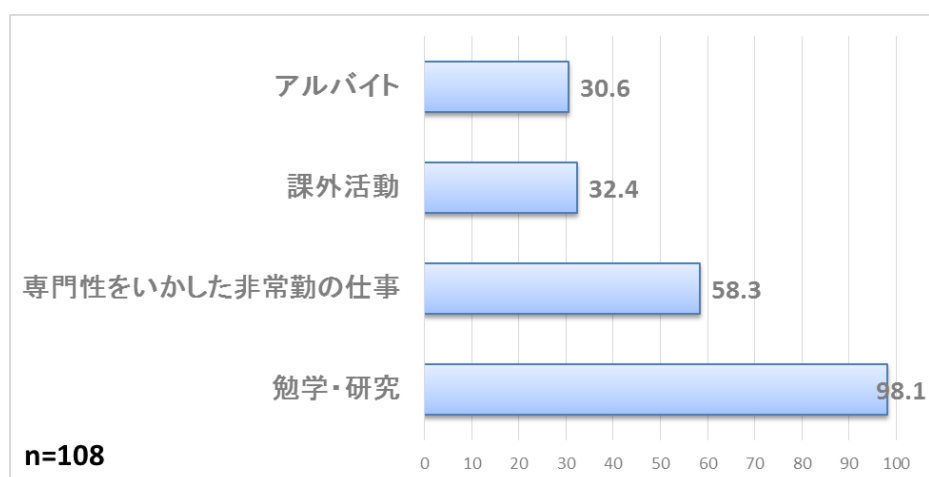


図 B11. 活動に力を入れた程度 (%)

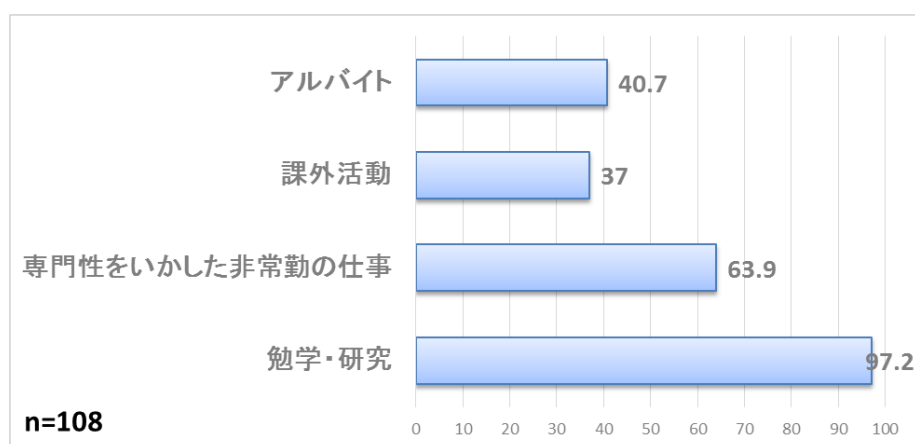


図 B12. 活動が役に立った程度 (%)

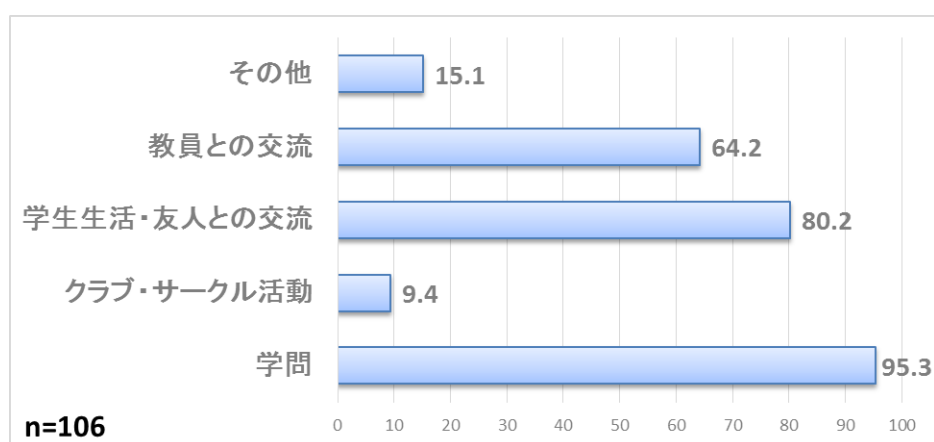


図 B13. 人生に大きな影響を与えたこと (%)